第一工業大学教職課程研究紀要
2020 年 4 月号（創刊号）

2020 年度

第一工業大学教職課程教育研究会

目次

巻頭言

教職課程研究紀要創刊号発刊にあたって

石本 弘治・・・ 2

研究論文

高校生の無気力について

一高校生における無気力感の拡がりの考察一

永田 正明・・・ 3

SDS による高校生の抑うつ感の考察

永田 正明・・・13

【巻頭言】教職課程研究紀要創刊号発刊にあたって

第一工業大学　工学部長　　石本　弘治

本学は、「個性の伸展による人生練磨」という建学の精神に基づき、社会が要請する高度な技術課題を理解し、それに関わる航空・情報・機械・環境・土木・建築など多様な領域について学び、その構造を究明し続ける高等教育機関として、多くの優れた人材を輩出して参りました。工学部の一学科であった航空工学科については、航空業界のニーズの高まりに対応する高度職業人を育成するために 2019 年度より航空工学部として組織を拡大強化したところです。

本学共通教育センターではいわゆる一般共通教育に加えて、教職課程も大きな柱の一つとしており、確かな教育理念と豊かな人間性を身につけた信頼できる教育者の育成を目標に今日まで取り組んで参りました。すでに鹿児島県・沖縄県を中心に 200 名を越す本学出身の教職員が活躍しております。工学に関する高い専門性を身につけた卒業生が、全国の学校現場で活躍することは「第一工業大学」の誇りであるだけでなく、次代を担う子どもたちに対して質の高い教育を提供することにも直結いたします。

本学教職課程教育研究会の「はじめに」でも述べられているとおり、Society5.0 時代を見据えた教育者の育成が急務です。AI や IoT が席巻するであろう近未来の社会をデザインし、牽引するのは紛れもない工学であり工学部を有する大学の使命であると考えております。そういった意味において、今後の教育界ではますます工学を知識基盤とした教職員のニーズは高まってくるものと推測いたします。

その一方で、今日の学校現場では特別な支援を必要とする子どもたちの増加やネグレクト・虐待・子どもの貧困など教育問題は多様化・複雑化への一途を辿っているのも事実であります。教育の専門家として様々な課題に日々立ち向かう教職員は最新の教育事情を適切に把握しなければならないと思われます。

今後本学における教員養成課程においても、工学／教育学の有機的な連携を図っていくことが重要な課題の一つになるものと思われます。本研究紀要はこのような問題意識に立ち、教職課程担当教員それぞれが教育の温故知新とは何かを念頭に置きつつ、「将来の教師」を育成するために、知の土台構築を目指すものとしております。

最後になりますが、本研究紀要が本学教職課程の質保証に貢献し、鹿児島県のみならず全国の教育関係者の方々に対し多少なりとも示唆を与え、意見交換を触発して教育研究と実践に寄与することを祈念いたします。

高校生の無気力について
ー高校生における無気力感の拡がりの考察ー

第一工業大学　共通教育センター　永田 正明

要旨

本研究では，うつを論じるのに状況論を抜きにできないこと，また学習性無気力の実験室的研究でも，引き起こされた無気力がある状況では般化し，別な状況では般化しないことが確認されていることから，健常な高校生においても場面依存性が見られるのか確認することを主な目的とした。無気力尺度高群に属する生徒の学年毎の度数分布傾向及び特徴から，無気力の拡がりについての基礎的分析を試みた。その結果無気力全体得点及び尺度別得点を見ても，無気力感は学年が上がるにつれて上昇するといった傾向はみられなかった。一部の尺度でわずかに学年による増加傾向が見られるが有意差はないレベルであり，学年が上がるにつれ高無気力感が拡がっているとは判断できなかった。

Key　Words：うつの場面依存性，無気力の般化

１．はじめに

精神科医である Walters(1961)は，大学生の無気力を最初に社会的に問題視し，学生無関心症候群(student apathy スチューデント・アパシー）と名づけた。彼らは，努力を必要とすることや苦痛を伴うことは，たとえそれが重要なことであっても避けてしまう。対人関係への関心が狭く，感動体験が少ないなどの特徴を持つ。一方，実験的に無気力を確かめたのは，Seligman & Maier(1967)であった。彼らは犬に電気ショックを与えて恐怖心を学習させるといういわゆるマイナス事象の学習をやっている際に，実際には電気ショックから免れようと飛び跳ねたりする学習が行われず，逆にもがいても無駄であるから行動しないという無力感が形成されることを確認した。この無気力は生まれつきのものでなく，コントロールできないという経験を重ねていくうちに次第に身に付いてしまった，いわゆる学習された無気力であるとして，特に学習性無気力(learned helplessness)と呼んだ。この後，人間でも同様に統制不可能な体験が後の行動遂行の低下をもたらすことが示された(Hiroto&Seligman, 1975)。

Abramson ら(1978)は，人間の認知の役割を重視する方向で理論の再構成を試み，改訂学習性無気力理論とした。人は自分の身のまわりに起こる変化や出来事に対してなぜだろうと考え，その原因を推量しようとするが，このような原因帰属をする存在としての人間に注目することが，改訂学習性無気力理論の基盤になっている。改訂学習性無気力モデルでは，コントロール不能な結果の経験によって，うつの症状が生じるまでのプロセスを Figure 1 のように仮定している。

改訂理論が発表されてから 10 年が経過し，その間改訂理論を検証するための，多くの実

験や調査が行われてきたが，同時に多くの問題点も指摘されてきた。

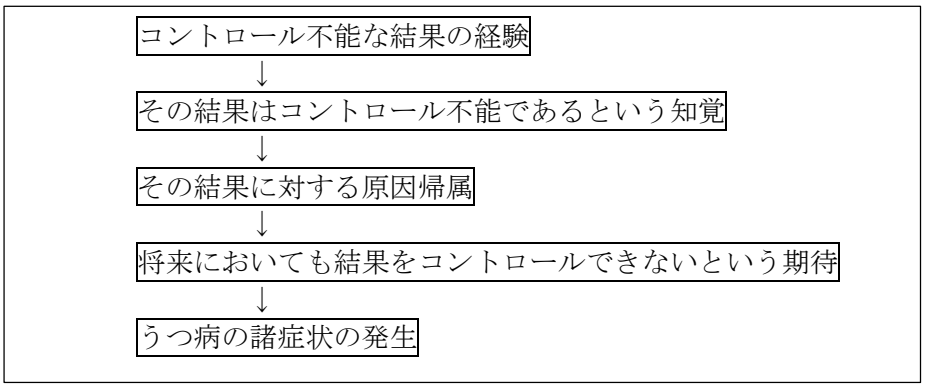

Figure 1　うつ病発生までのプロセス(Abramson ら，1978)

そこで，新たに絶望感理論(Hopelessness Theory)が提案された(Abramson, Metalsky & Alloy，1989)。絶望感理論では，まだ同定されていない抑うつの特殊型-絶望感抑うつ-という存在を仮定している。Abramson らは，1978 年の改訂理論を区別する改訂のキー概念を(a)絶望感抑うつの症状の近接的十分条件（原因）として絶望感を導入する。(b)原因帰属をあまり強調しない。(c)推定される否定的な結果や，推定される自己に関する否定的な特性も絶望感の形成に寄与する必要条件であったり，絶望感抑うつの症状に寄与する必要条件であったりするとしている。改訂版は，抑うつの帰属理論というより絶望感理論であり，1978 年の論文より他の抑うつの認知理論に類似している。

国内その後の研究で，大学生に特有の状態として概念化された無気力状態が，中学生や高校生，さらには社会人にまで及ぶ，より広い年齢層にもみられることが指摘された。(樋口,1981)。また精神医療や学生相談で取り上げられた重篤な無気力状態ばかりでなく，一般の学生・生徒の無気力傾向や状態像の多様化が示唆された。

さらに，この無気力傾向は本来生き生きとしている小学生にまで及んでいるとの指摘もなされて久しい。このように無気力傾向の一般化，低年齢化という点を考えると，一般的な小・中・高校生の無気力状態を調査することは，正常な学校教育を展開する上でも意義あることと考えられる。

２．研究の目的

本研究では，うつを論じるのに状況論を抜きにできないこと，また学習性無気力の実験室的研究でも，引き起こされた無気力があるときは般化し(e.g. , Hiroto & Seligman，1975)，ある時は般化しないこと等(e.g.，Cole & Coyne，1977)から，健常な高校生においても場面依存性と言えそうなものが見られるのかについて確認したい。そのため従来の無気力の気分や症状といった特性そのものに焦点をおいた無気力尺度ではなく，高校生が日常生活する中で感じている無気力を場面毎に検討できるような尺度作成を試みる。

研究 2 では無気力各尺度高群に属する生徒の学年毎の度数分布傾向及び特徴から，無気力の拡がりについての基礎的分析を試みる。無気力の般化現象についても調べたいが，般化現象を調査するには長期にわたる縦断的検討が必要でありかつ，高校生段階より小・中学生段階の方が現象として現れやすいのではないかと考えられる。

３．研究１

被験者：予備調査は高校 2 年生 169 名（男子 99 名女子 70 名）
本調査は高校 1～3 年生 527 名（男子 332 名，女子 195 名，普通科：工業科＝２：３の人数比）

（1）無気力質問紙

抑うつ症状や抑うつ気分を測定する自己記入式尺度については，外国版ではＢＤＩ(Beck Depression Inventory, 1996), Kazdin らの絶望感尺度(The hopelessness scale for children, 1986)，ＳＤＳ(Zung Self-Rating Depression Scale，1965)，またこれらの日本語版などが知られている。何れも無気力の気分や症状そのものを測定するものとして優れているが，健常な高校生の日常的に見られる無気力を測定するものとしては，中澤・宮下(1995)の作成した無気力質問紙の方が適していると考えられるため，本研究ではこれを使用した。中澤らは高校生・大学生を対象に，日常生活における無気力の程度を多面的に捉えることを主眼とした。また青年期の無気力は，動機づけ・情緒・認知に見られると考え，青年の生活の文脈に合わせて以下の 5 つの側面から尺度を構成している。

1. 「授業・学習態度・テスト有能感」これは無気力の学業面への反映として，学習意欲減退の程度を測定するもの。
2. 「生活のリズム・疲弊・身体不調」これは無気力の身体面への反映として，生活の乱れや意欲減退に伴う心身の状態を測定する。
3. 「人生目標・将来の見通し」これは無気力の基盤としての目標や見通しの程度を測定するもの。
4. 「達成度・動機づけ・自己効力感」これは無気力の中心的概念であり，自己の行動への意欲や自信の程度を測定するもの。
5. 「社会的場面での非能動性・引きこもり」これは無気力の社会面への反映として，対人的退行を測定するもの。

中澤らの質問紙５０項目に「クラブ活動や部活動はやりたくない」など具体性のある４項目を新たに加えて全５４項目とした。また，中澤らの質問紙の回答方法は「とてもそう思う」，「かなりそう思う」，「あまりそう思わない」，「まったくそう思わない」の 4 段階評定で回答を求め上記の順に 4～1 点を与えているが，4 件法では自分を判断しにくい項目のことも考慮し，中間に「どちらとも言えない」を加えた 5 件法で回答を求めた。

（２）調査時期と方法

調査時期として 6 月から７月までに調査を終了するように学級担任に依頼した。理由として，１年生は入学後の緊張から解放され，自分の期待していた高校生活のイメージと異なり意欲が減退したりする頃である。逆に３年生からすると，いよいよ自分の進路に向かって計画実践の追い込みが始まり，具体化されつつある目標が見え，部活動でも最後の全国予選が終了し落ち着きが出始める頃でもあるからである。また２年生は高校生活にもすっかり慣れ，進路先を決定するのはまだまだ先の話であるといった未来展望感を持っている生徒が多く見受けられることも学校現場教師は実感している。上記のような学年別の特徴が質問紙調査に反映されるかどうか確認したい。

質問紙のタイトル等は「無気力調査」という文言は使わずに「活力に関する調査」として生徒ができるだけ素直に答えられるように配慮した。また，不真面目な回答をできるだけ避けるため，学級担任のＬＨＲの時間等を利用してもらい，記名式の調査とした。

（３）項目分析・因子分析結果

予備調査により選定された 33 項目について，総得点の上位と下位 25%に該当する被験者を抽出しｔ検定によりＧ－Ｐ分析を行ったところ，すべての項目に 1%水準の有意差が認められ，いずれも弁別性のある項目であることが明らかとなった。さらに 33 項目を主成分法により固有値 1.0 以上の基準で 6 因子を抽出し，バリマックス回転を施した分析結果を Table 1 に示した。因子間の関連を考慮してプロマックス回転も念のため行ったが，分析結果はほぼ同じであったのでバリマックス回転の結果を採用した。因子負荷量 0.4 以上を基準として，因子負荷量の小さかった 1 項目を除外し下位尺度を選定した。因子名は，第 1 因子「意欲減退・無力感」，第 2 因子「消極的人間関係」，第 3 因子「将来の展望の欠如」，第 4 因子「学習意欲の欠如」，第 5 因子「打ち込む領域の欠如」，第 6 因子「消極的活動性」と解釈された。内的整合性は，クロンバックのアルファー係数により算出した。第 1 因子よりそれぞれ，0.73，0.75，0.81，0.67，0.63，0.60 であった。第４，第５，第６因子のアルファー係数がやや低いが，項目数が 4～6 と少ないわりに因子負荷量はあるので，Table 1 に示した 6 因子解の尺度構成とした。

Table 1　無気力因子と項目

第１因子（意欲減退・無力感）
２９　つかれて、何もしたくなくなることが多い。
３３　いろいろなことが、めんどうくさく思えることが多い。
２３　すぐ、体がだるくなってしまう。
６　授業には、なかなか集中できない。
１５　いくら努力しても、だめなことが多い。
２８　学校の授業についていけない。
１６　自分がなさけなくていやになる。
１３　つかれて、授業中いねむりをしてしまうことが多い。
第２因子（消極的人間関係）
３　ほかの人といっしょにいると、くたびれる。
１０　悩みを話せる人がいない。
５　人とつきあうのは、めんどうくさい。
１９　一人でいるのが、いちばんだ。
３０　困ったとき、相談できる人がいる。（Ｒ）
２６　同級生とは、どうでもよいことしか話さない。
第３因子（将来の展望の欠如）
３２　将来やりたいことが、はっきりしている。（Ｒ）
８　将来つきたい仕事が、決まっている。（Ｒ）
２　高校卒業後の進路を決めている。（Ｒ）
１８　自分の夢が実現するとは思えない。
第４因子（学習意欲の欠如）
１　授業のノートは、きちんととるようにしている。（Ｒ）
１１　テストがあると言われたら、そのための勉強をする。（Ｒ）
９　もっと良い成績をとりたい。（Ｒ）
２５　テストの成績が悪くても、あまり気にしない。
２１　家で、自分から勉強することはない。
１４　勉強でわからないことがあると、自分で調べてみる。（Ｒ）
第５因子（打ち込む領域の欠如）
４　勉強以外で熱中しているものがある。（Ｒ）
２７　勉強以外に、これだったら自分にまかせてくれというものがある。（Ｒ）
１７　自分には、得意なものがある。（Ｒ）
３１　いくらがんばってもどうにもならないので、勉強してもむだだと思う。
第６因子（消極的活動性）
７　学級内での係りは、できればさけたい。
２２　委員など、責任ある役につくのはいやだ。
２４　クラブ活動や、部活動はやりたくない。
１２　そうじは、やらないことが多い。

（4）無気力尺度平均と分散分析結果

Table 3 に無気力尺度平均と分散分析結果を示した。無気力全体得点及び尺度別得点を見ても，無気力感が学年が上がるにつれて上昇するといった明らかな傾向はみられなかった。最初に予測していたとおり「将来の展望の欠如」及び「消極的活動性」尺度のみ 2 年生より 3 年生のほうが減少している。「無気力全体」得点で２年生より３年生が若干減少していることは，これら２尺度によると考えられる。

Table 2　無気力の因子分析結果（VARIMAX 回転,N＝527）

項目	FACTOR1	FACTOR2	FACTOR3	FACTOR4	FACTOR5	FACTOR6	共通性
X29	0.6484	0.0695	0.0038	−0.1000	−0.0744	0.2294	0.4885
X33	0.6257	0.1603	−0.1197	0.0501	0.0654	0.3156	0.7026
X23	0.5745	0.1313	−0.0469	−0.0886	−0.0041	0.2644	0.5644
X6	0.5743	0.0039	−0.0251	0.2868	−0.0366	0.0198	0.5210
X15	0.5629	0.2311	0.0590	0.0150	0.1686	−0.0616	0.5453
X28	0.5312	−0.0181	0.1206	0.1419	0.2185	0.0481	0.4145
X16	0.4746	0.2132	−0.0424	−0.2475	0.2120	−0.0293	0.6164
X13	0.4261	0.0093	0.1249	0.3082	−0.2856	0.0008	0.7958
X3	0.1516	0.7049	−0.1463	−0.0476	0.0579	0.1322	0.4286
X10	0.0220	0.6680	0.1256	0.1637	0.0009	−0.1143	0.5024
X5	0.1577	0.6672	−0.0678	0.0203	0.1191	0.2367	0.4516
X19	0.1802	0.6433	−0.0229	−0.0270	0.0137	0.0408	0.2948
X30	−0.0471	0.6246	0.2450	0.0504	−0.0362	−0.1227	0.3738
X26	0.0667	0.5897	0.0716	0.0594	0.0271	0.1534	0.4149
X32	−0.0186	0.0230	0.8854	0.0483	0.1377	0.0697	0.4062
X8	−0.0260	0.0247	0.8833	0.0152	0.0750	0.0919	0.3795
X2	−0.0299	0.0359	0.8098	0.1403	0.1104	0.1127	0.5107
X18	0.2249	0.1813	0.4523	−0.0882	0.2799	−0.0123	0.3743
X1	0.0478	−0.0047	0.0443	0.6928	−0.0021	0.0647	0.4495
X11	0.0440	0.0677	−0.0279	0.6662	0.0151	0.0189	0.2619
X9	−0.2418	0.1349	0.0139	0.5472	0.1104	0.2002	0.3909
X25	−0.0580	0.1307	0.0019	0.5402	−0.0018	0.1135	0.5615
X21	0.3679	−0.0715	0.0208	0.4964	0.0495	0.0327	0.4272
X14	0.2548	−0.1540	0.1938	0.4926	0.2130	−0.0252	0.3778
X4	−0.1105	0.0302	0.0418	0.0278	0.7002	0.1229	0.3252
X27	0.1000	−0.0087	0.1727	−0.0090	0.6848	0.0770	0.3851
X17	0.1224	0.0036	0.1824	0.0585	0.6771	0.0254	0.5148
X31	0.3771	0.1768	0.0327	0.3220	0.4054	−0.0100	0.3673
X20	0.2637	0.1662	0.0371	0.2490	0.3149	−0.0472	0.4934
X7	0.1395	0.0736	0.0660	0.1409	0.0554	0.7511	0.4712
X22	0.1547	0.0191	0.1523	0.0500	0.0143	0.7151	0.4426
X24	0.0254	0.1398	0.0248	0.0781	0.2940	0.5143	0.8109
X12	0.2577	0.0088	0.0510	0.2830	−0.0937	0.3699	0.5379
説明分散	3.24	2.87	2.72	2.62	2.18	1.94	
寄与率	15.64	8.81	7.34	6.15	4.82	4.51	
累積寄与率	15.64	24.45	31.79	37.95	42.77	47.28	

Table3　無気力尺度平均（上平均,下標準偏差）と分散分析

学年	人数	無気力全体	意欲減退・無力感	消極的人間関係	将来の展望の欠如	学習意欲の欠如	打込む領域の欠如	消極的活動性
１年	189	2.50	2.93	2.19	2.52	2.18	2.35	2.75
		0.39	0.63	0.73	0.96	0.57	0.73	0.79
２年	163	2.61	3.04	2.22	2.63	2.32	2.40	2.93
		0.43	0.65	0.73	1.02	0.63	0.73	0.80
３年	175	2.49	3.06	2.17	2.18	2.30	2.29	2.68
		0.48	0.68	0.78	0.90	0.67	0.88	0.84
分散分析		*	N.S	N.S	***	N.S	N.S	**
TUKEY 法		2 年〉3 年			2 年〉3 年			2 年〉3 年

*** P＜.001　** P＜.01　* P＜.05

４．研究２

１年生～３年生全員を対象として，無気力各尺度得点の高い方から約 25%毎に，無気力高群，無気力中上群，無気力中下群，無気力低群とした。特に各尺度で無気力高群に入る者だけの度数分布傾向をつかみ，高校 3 年間での高無気力感の拡がり方について検討する。

（1）高群尺度保有数%

はじめに個人が無気力高群尺度をいくつ保有しているのか学年毎に検討した。結果は学年総人数に対する％で示し，学年間の χ^2 検定を行った。Table 4 にその結果を示した。

高群尺度保有数 0 の者が学年が上がるにつれて単調に減少しないことから，高校生になってから無気力高群尺度が初めて出現する生徒はほとんどいないといえる。高校 3 年間の間に高無気力感が拡大するとしたら, 1 年生から 3 年生になるにつれて無気力高群尺度保有数が増加すると考えられるが, そのような増加傾向は見られなかった。また各学年における無気力高群尺度保有数の状況は似た傾向であることがわかる。ただしこの横断的な表では, ある高群尺度が 1 年後に低群になったとしても，別な高群尺度が 1 年後に出現すると見かけ上は増減がないように見えることになるので，より正確な傾向は縦断的研究でなければ判断できない。

（2）尺度別高群者数%

次に尺度別に無気力高群者数の学年比率に差異が見られるのかについて検討を行った。各学年間の χ^2 検定も行い，その結果を Table 5 に示した。

「意欲減退・無力感」尺度,「消極的人間関係」尺度,「学習意欲の欠如」尺度では，わずかに学年による増加傾向が見られるが有意差はないレベルであり，学年が上がるにつれて高無気力感が拡がっているとは判断できない。「打ち込む領域の欠如」尺度,「消極的活動性」

尺度においては，高群者数の明らかな学年差は認められなかった。「将来の展望の欠如」尺度においては，2 年生から 3 年生にかけて高群者数が有意に減少していた。この点は，3 年生の 7 月頃には多くの生徒の進路目標が定まり，充実した高校生活を過ごし「将来の展望」がはっきりしてくることを反映していると考えられる。Table 5 から判断できることは，高校生活の中核をなしている「学習面」・「友人関係」・「部活動や学校行事，学級活動」といった活動領域別にみても，無気力感の強い生徒は 1 年生，2 年生，3 年生といった学年とは無関係に一様に存在していることがわかる。ここで「部活動や学校行事，学級活動」という活動領域とは「打ち込む領域の欠如」と「消極的活動性」尺度のことを指している。

Table 4　無気力高群尺度保有数%（各学年総人数を 100%とした，カッコ内人数）

保有数	０尺度	１尺度	２尺度	３尺度	４尺度	５尺度	６尺度
1 年	27.5 (52)	30.7 (58)	23.3 (44)	13.8 (26)	4.2 (8)	0.5 (1)	0
2 年	25.8 (42)	24.5 (40)	18.4 (30)	18.4 (30)	9.8 (16)	3.1 (5)	0
3 年	27.4 (48)	31.4 (55)	21.1 (37)	10.9 (19)	5.7 (10)	1.1 (2)	2.3 (4)
χ^2	n.s	n.s	n.s	n.s			

Table 5　尺度別無気力高群者数%（各尺度高群総人数を 100%とした，カッコ内人数）

	意欲減退・無力感	消極的人間関係	将来の展望の欠如	学習意欲の欠如	打ち込む領域の欠如	消極的活動性
1 年	29.5 (41)	30.3 (43)	28.6 (54)	21.2 (40)	22.8 (43)	21.2 (40)
2 年	34.5 (48)	33.1 (47)	31.9 (52)	27.0 (44)	23.3 (38)	30.7 (50)
3 年	36.0 (50)	36.6 (52)	14.9 (26)	29.1 (51)	24.0 (42)	22.3 (39)
χ^2	n.s	n.s	**	n.s	n.s	n.s

** P<.01

５．考察

Table 3 から全生徒を対象にした学年別の無気力感の拡がりは，無気力全体得点で見ても，無気力尺度得点で見ても拡大する傾向は認められなかった。さらに Table 4，Table 5 では無気力尺度別に無気力高群の生徒を対象にして，学年が上がるにつれてどのような挙動を示すのか探索したが有意な傾向は認められなかった。

しかしながら高無気力感を低減する手段として，「将来の展望の欠如」得点を下げることで「無気力全体」もっと的を絞って言えば「意欲減退・無力感」も低められる可能性が示唆された。言い換えれば，高校生の早い段階で「将来の展望」となる具体的な卒業後の進路目

標を持つことで，高校生活を無気力に過ごさずに済むかもしれないということである。

前述したように横断的調査の限界はあるので，正確な調査としては縦断的調査を２年間実施する必要が高まったと言える。今回の調査結果から言えることとして，無気力感の拡がりを見るには小・中学生段階を考えてみることが調査手段として有意味であるのかもしれない。しかしながら，小・中学校の教育現場からすると教育効果があると考えられそうなことは歓迎されるが，本調査のように調査することが生徒に対して直接的にプラスの効果があると考えられにくい調査は歓迎されにくいことも事実であろう。今回の調査も教育委員会，学校長，各学級担任の先生に御協力いただいたことに改めて感謝したいと思う。

注記：本論文は，兵庫教育大学大学院学校教育研究科に提出された修士論文(1997 年度)の分析手法を変更・再分析し，加筆修正したものである。

【引用文献】

Abramson,L.Y., Seligman,M.E.P. & Teasdale,J.D. 1978 Learned helplessness in humans :Critique and reformulation. Journal of Abnormal Psychology, 87, 49-74.

Abramson,L.Y., Metlsky,G.I. & Alloy,L.B., 1989 Hopelessness depression: A theory-based subtype of depression. Psychological Review , 96, 358-372.

Alloy,L.B., Peterson,C., Abramson,L.Y. & Seligman,M.E.P. 1984 Attributional Style and the generality of Learned Helplessness. Journal of Personality and Social Psychology, 46,681-687.

Beck,A.T.,Steer,R.A., & Brown,G.K. 1996 Manual for the Beck Deprssion Inventory,Second Edition. The Psychological Corporation.

Cole, C.S., & Coyne, J.C. 1977 Situational specificity of laboratory-induced learned helplessness in humans. Journal of Abnormal Psychology, 86,615-623.

樋口和彦　1981　ポスト・スチューデントの時代　笠原　嘉・山田和夫編　『キャンパスの症候群』　弘文堂　253-283.

Hiroto,D.S., & Seligman,M.E.P 1975 Generality of Learned helplessness：Theory and evidence. Journal of Personality and Social Psychology, 31,311-327

笠井 孝久　三浦 香苗　保坂 亨　1994　小学生・中学生における無気力感の構造 千葉大学教育学部教育相談研究センター年報,11,13-26

中澤 潤　宮下 一博　1995　青年期の無気力－高校生・大学生を対象とする無気力尺度の開発－ 千葉大学教育学部教育相談研究センター年報,12,11-19

Seligman,M.E.P., & Maier,S.F. 1967 Failure to escape traumatic shock. Journal of Experimental Psychology, 74,1-9.

Seligman, M.E.P. 1975 Helplessness ： On Depression Development and Death. W.H.Freeman and Company,San Francisco.(平井 久・木村 駿監訳 1986 うつ病の行動学 誠信書房)

Walters,P.A. 1961　スチューデント・アパシー　石井完一郎ら訳　『学生の情緒問題』　光

文社　186-203.
Zung,W.W.K. 1965　A Self-Rating Depression Scale. Archives of General Psychiatry, 12, 63-70.

―受稿 2020.3.23、受理 2020.4.20―

SDSによる高校生の抑うつ感の考察

第一工業大学　共通教育センター　永田 正明

要旨

思春期の心の健康を把握するためには，心理的に否定的な感情である「抑うつ気分」あるいは「抑うつ症状」を抱いていると思われる生徒対象の調査も一予防手段として意味があると思われる。特に小・中・高等学校においてはこういったマイナスイメージ的な調査研究は少ないように思う。高校生の抑うつ感が実態としてどのようであるのか，臨床現場でも使用されている質問紙を使用して，その基本的データを検討することを研究の目的とする。高校1年生に対してＳＤＳ日本語版（福田・小林，1973）を実施した。Table 1 及びFig 1 に示したとおり，高校生から大学生といった青年期においては，平均点やヒストグラムで見る限り，やや抑うつ気分を感じているといえる。

Key Word：ＳＤＳ日本語版，ｶｯﾄｵﾌﾎﾟｲﾝﾄ，有症率

１．はじめに

抑うつ(depression)は心理学的，精神医学的には,概ねその症状が軽い順に「抑うつ気分(感情)」「抑うつ症状(状態)」「うつ病(疾病単位)」の３つのものを指している。「抑うつ気分」とは，悲しくなったり・落ち込んだ気分のことであり，誰でも経験するものでありこれだけでは治療の対象とならない。「抑うつ症状」は抑うつ気分とともに生じやすい心身の状態で，興味の喪失，易疲労性，自信喪失，自責感，自殺念慮，焦燥，不眠，食欲減退などである。これらがまとまると抑うつ症候群となる。「うつ病」と診断されるには，(1)抑うつ気分が一定期間持続(２週間以上)すること，(2)抑うつ気分あるいは興味喜びの喪失を含み，抑うつ症状が複数あること，(3)器質的原因が否定できること，(4)統合失調症や失調感情障害に該当しないこと，などの基準をＤＳＭでは示している。

思春期は心身の急速な発達のため心的に不安定でありかつ，学校のみならず家庭においても多くのストレスを抱えている生徒が多い。このような状況が日常的に続くようであれば，時に生徒は問題行動を起こしたり，自傷行為や自殺念慮を抱くことも少なくない。しかし実際の教育現場では，心の健康に対する組織的な対応ができている学校は少ないため，いじめや不登校，最悪の自殺問題を未然に充分に防止できるまでには至っていない現状もある。思春期の心の健康を把握するためには，精神医学の診断基準に基づく精神疾患だけでなく，心理的に否定的な感情である「抑うつ気分」あるいは「抑うつ症状」を抱いている生徒を対象とする調査も一つの予防手段として意味があると思われる。「抑うつ症状」は臨床現場ではしばしばみられるが，正常者の精神的健康度を評価する指標としてもよく用いられる。子どもの心身症には抑うつ症状が多かったり，不登校生徒にも抑うつ気分が強く出て来ることもある。欧米では思春期であっても精神的健康に関する多くの研究が行われ，抑うつ

症状の出現頻度や要因分析などについての実証的検討がなされている。しかし，我が国，特に小・中・高等学校においてはこういったマイナスイメージ的な調査研究は少ないように思う。

２．目的

上述したように抑うつに関する実証的研究は，今後もその重要性は増すものと考えられる。諸外国では抑うつの概念的検討や研究法について盛んに議論されているが，我が国ではこれらの議論が少ないように思う。また他方，我が国の抑うつに関する臨床心理学的な研究はそのほとんどが事例研究であり（奥村ら，2008），事例研究以外の実証研究を蓄積すること自体に意義はあると考えられる。事例研究以外の心理学的研究の多くは，健常な大学生を対象とする無気力研究や，いわゆるスチューデント・アパシーを取り扱った無気力研究が圧倒的に多い。抑うつ研究の対象が高校生ともなると授業時間の確保問題があり，研究への理解・協力を依頼しにくい現実もある。本研究ではこういった問題に焦点を当て，高校生の抑うつ感が実態としてどのようであるのか，臨床現場でも使用されている質問紙を使用して，その基本的データを検討することを研究の目的とする。

３．方法

（１）被験者

高校１年生 734 名（男子 526 名，女子 208 名，普通科：専門科＝6 クラス：15 クラスの比率）

（２）調査時期

調査内容や方法，調査の意義と目的などを各学校長に説明・依頼した上で，実施許可を得られた同一県内５校の高校 1 年生に対してＳＤＳ日本語版を 2001 年 12 月に実施し有効回答は 734 名であった。

（３）質問紙

うつ病の診断・病状の評価は，病歴聴取，問診などの精神医学的技術によって詳細かつ慎重になされることが基本である。したがって，うつ病の心理測定には限界があることは明らかである。うつ病の心理検査について言えば，投影法としてロールシャッハ法が解釈されてきたし，ＴＡＴを用いてうつ病患者の性格傾向を研究したものもある。質問紙法としてはＭＭＰＩ，矢田部ギルフォード検査は，パーソナリティー特性を見ようとしているが，下位尺度には抑うつ尺度も持っている。その後，うつ病の心理テストとして Hamilton,M.A.(1960)，Beck,A.T.(1961)，Wechsler,H.(1963)らの検査法が開発された。これらの検査項目は，患者の症状や態度，医師の臨床経験に基づくものであったり，評価者が心理学者であったり，項目数が非常に多くなったりと評価基準が絞り切れないようにも見えるが，うつ病を状態像

として掌握する態度は共通している。ＳＤＳもそのような流れの中で開発された抑うつ状態像に関する情意テストである。奥村ら(2008)は，1990 年から 2006 年までの主要な国内学術雑誌に掲載されている抑うつ研究のうち，どういった抑うつ測定尺度がよく使用されているかを調べたところ，ハミルトンうつ病評定尺度(他者評価：Hamilton,1960)が最も多く 38.9%，次いでツァン自己評価式抑うつ尺度(Zung,1965)が 33.9%，ベック抑うつ質問紙(Beck,1961)15.6%の順であった。

本研究ではＳＤＳ日本語版（福田・小林，1973）を使用するが，性欲に関する項目「まだ性欲がある」は高校生には刺激があり防衛反応が予想されるため，更井（1979）や大谷ら（1999）が使用している項目「異性に関心がある」に変更したものを使用した。また，漢字には読み仮名をふり誤解を防ぐように工夫した。ＳＤＳは抑うつ症状を定量化するため，研究者の報告した因子分析結果をもとに 20 項目から構成され，「1 点：ない」から「4 点：いつもある」までの 4 点尺度で回答するため，合計が 20 点から 80 点までとなる。80 点満点であると比較検討しづらいため，この合計点を 1.25 倍して 100 点満点(ツァン指数)とする方法もある。ＳＤＳ日本語版（福田ら，1973）では，うつ病者群・神経症患者群・正常者群を被験者としてＳＤＳを実施し，信頼性と妥当性を確認している。

４．結果

Fig 1 に男女込みでＳＤＳ合計得点別の度数分布を，Table 1 に基礎統計量を示した。ＳＤＳ合計得点の度数分布を見ると，歪度 0.00 が示すように平均点を中心として左右対称となっているようである。ただし，尖度-0.06 が示すように平均点付近が平坦となった得点分布ではあるが，ほぼ正規分布に近い分布型がうかがえた。Table 1 にある沖縄県高校生の尖度でも同様に平均付近での平坦な度数がみられる。このことは日本での一般的なＳＤＳのカットオフポイントが 39/40 点であり，40 点～49 点を「軽度の抑うつ傾向あり」とスクリーニング判断していることを考慮すると，抑うつ感だけを見ると高校生のやや多くが，抑うつ状態であったり抑うつ気分を感じていると考えられる。また，本研究の平均点 43.1 という数字自体も，やや抑うつ的であると判断してよさそうである。Table 1 及び Fig 1 に示したとおり，高校生から大学生といった青年期においては，平均点やヒストグラムで見る限り，やや抑うつ気分を感じているといえる。

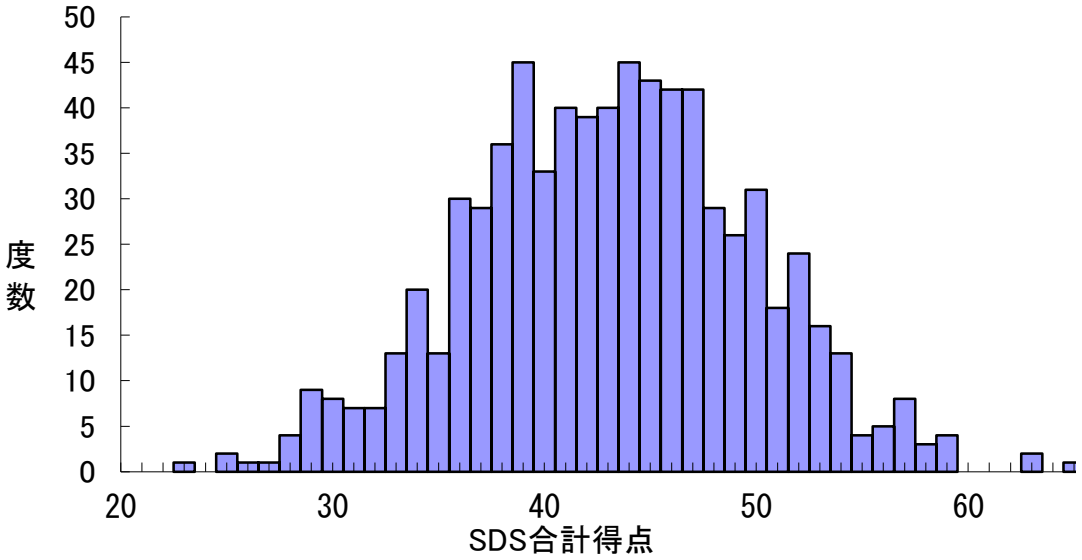

Fig.1　SDS 得点度数分布

Table 1　SDS の基礎統計量

	年度	n	平均値	標準偏差	尖度	歪度
高校 1 年生男女(本研究)	2001	734	43.12	6.66	-0.06	0.00
沖縄県高校 1～3 年男子 [1)]	1994	1415	40.40	6.97	0.57	0.43
沖縄県高校 1～3 年女子 [1)]	1994	1520	41.70	6.76	-0.05	0.19
国内大学短大生男女 [2)]	2009	2465	44.68	8.11	0.15	0.18
東京都内大学 1～4 年男女 [3)]	2003	233	42.20	6.60		
東京都内大学生男女 [4)]	2009	94	43.00	8.37		

Table2　SDS 項目別平均と有症率

		平均	SD	有症率	有症率[1)]
1	抑うつ	1.69	0.72	56.9	64.9
2	日内変動	3.41	0.79	95.2	89.8
3	啼泣	1.30	0.60	24.6	43.8
4	睡眠	1.52	0.78	38.7	52.0
5	食欲	1.84	1.08	43.5	48.0
6	性欲	2.66	1.06	78.6	75.2
7	体重減少	1.28	0.66	20.0	28.1
8	便秘	1.24	0.62	17.2	31.7

9	心悸亢進	1.33	0.61	26.3	30.4
10	疲労	2.54	1.02	86.4	79.6
11	混乱	2.74	0.94	85.8	86.2
12	精神運動性減退	2.33	1.01	72.9	91.0
13	精神運動性興奮	1.90	0.94	60.2	60.1
14	希望のなさ	2.58	1.15	72.8	87.0
15	焦燥	1.73	0.78	56.8	37.4
16	不決断	3.03	0.89	90.9	90.8
17	自己過小評価	3.20	0.83	94.9	94.8
18	空虚	2.54	1.00	80.1	86.6
19	自殺念慮	1.38	0.69	28.5	23.2
20	不満足	2.87	0.97	86.9	58.6

項目得点が 2 点以上を症状有りとした

５．考察

本被験者 734 名のうち，ＳＤＳ得点 40 点～49 点（軽度の抑うつ傾向）は 51.6%，50 点～65 点（中程度の抑うつ傾向）は 17.6%の生徒に見られた。カットオフポイントを 39/40 点と考えるなら，実に 69.2%の高校生が抑うつ傾向ありと判定される予想外に高い数値であった。しかし，沖縄県の高校生[1)]でも同様に有症率（SDS 合計得点で 40 点以上を有症としている）男子 53.4%，女子 61.4%と高い有症率であったり，更井(1979)の一般人でも有症率 51.9%であったことなどから考えられない数値ではない。その理由として，(1)被験者である 1 年生の 2 学期末の時期は学習意欲などが低下し，卒業までが長いと感じている頃である，(2)Garrison ら(1989)は思春期集団に成人用のカットオフポイントを用いると半数がこれを越えることを報告しているように，思春期健常者に対するカットオフポイント自体に無理がある，(3)Table 2 を見ると，いずれも逆転項目である項目 14「将来に希望がある」，項目 16「たやすく決断できる」，項目 17「役に立つ，働ける人間だと思う」，項目 18「生活はかなり充実している」，項目 20「日頃していることに満足している」は，抑うつ症状や抑うつ気分というより，自己有能感や充実感といった自己認知度を測定している可能性がある，ことなどが考えられる。

今回明白になったことは，ＳＤＳにおいても高校生の抑うつ感は多くの生徒が感じており，こういった抑うつ感も問題行動やいじめ，不登校問題にも発展する一つの可能性を否定できない点であろう。何がこのような抑うつ感に作用しているかを考える場合，学習や友人関係や家庭問題などのストレスが真っ先に疑われるが，この点を明らかにするためにはＳＤＳとのテストバッテリーを使用した縦断研究の必要性があろう。しかし緒言や目的に述べたように，マイナスイメージの調査を長期にわたり実施することは難しい一面もある。

【引用文献】

Beck,A.T., Ward,C.H., Mendelson,M., Mock,J. & Erbaugh,J.(1961):An inventory for measuring depression.Arch.gen.psychiat.,4;561-571.

福田　一彦(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究　精神神経学雑誌, 75, 673-679.

Garrison,C.Z.,et al.(1989)　Epidemiology of depressive symptoms in young adolescents. J Am Acad Child Adolesc Psychiatr.

Hamilton,M.A.(1960):A rating scale for depression.J.Neurol.Neurosurg.psychiat., 23;56-62.

3)狩野　武道(2008). 大学生における無気力の分類の試み　こころの健康, 23, 2-10.

奥村　泰之(2008). 1990 年から 2006 年の日本における抑うつ研究の方法に関する検討　パーソナリティ研究, 16, 238-246.

大谷　明(1999). ＳＤＳの質問文の表現に関連した応答バイアスの検証　行動計量学, 26, 34-45.

4)島津　直実(2014). 反応スタイルと抑うつに関する因果モデルの検討　心理学研究, 85, 392-397.

1)高倉　実, 他(1996). 高校生の抑うつ症状の実態と人口統計学的変数との関係　日本公衛誌, 43, 615-623.

2)塚原　拓馬(2011). ＳＤＳを用いた青年期の抑うつ傾向に関する現象記述的研究　健康心理学研究, 24,50-59.

Wechsler,H., Grosser,G.H. & Busfield,B.L.(1963) :The depression rating scale. Archives of General Psychiatry.,9;334-343.

Zung,W.W.K. (1965) A Self-Rating Depression Scale. Archives of General Psychiatry, 12, 63-70.

―受稿 2020.4.13、受理 2020.4.20―

執筆者一覧（執筆順）

永田　正明　　第一工業大学共通教育センター准教授

紀要編集委員一覧

永田　正明　　第一工業大学共通教育センター准教授／共通教育センター長（紀要編集委員長）
當金　一郎　　第一工業大学工学部情報電子システム工学科教授／教務部長
中薗　政彦　　第一工業大学共通教育センター准教授
德永　博仁　　第一工業大学共通教育センター准教授
竹下　俊一　　第一工業大学共通教育センター准教授
原北　祥悟　　第一工業大学共通教育センター助教／紀要編集事務局長

第一工業大学教職課程研究紀要　2020 年 4 月号（創刊号）

2020 年 4 月 27 日　発行

編集・発行　第一工業大学教職課程教育研究会
鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2